リレー連載

越境と躍動のフィールドワーク①

井上 真
東京大学大学院教授（国際森林環境学）

フィールドワークは総合格闘技だ！歩く、見る、聞く、話す。読む、書く、考える。研究と実践をどう橋渡しするのか。開発と環境をどう調和させるのか。――若いフィールドワーカーたちが、七転び八起きの舞台裏を披露。現場に学びたい人、実践を志す人を熱い議論に誘う。

これは、最近出版した書籍『躍動するフィールドワーク――研究と実践をつなぐ』（世界思想社、二〇〇六年）の帯の宣伝文句である。

人間と森林や野生動物とのかかわりを探るためのフィールドワークをやっていると、研究室にいては知るよしもない様々な刺激に遭遇する（図3、図4）。心休まる農村の風景、話者の微妙な表情、歩いて体感した隣村までの距離感、ぼくとつと話す長老の声、会話の間合いの変化。このような雑多な刺激から、いかにして意味ある情報を引き出すのか。ちょっとした変化の意味をいかにして読み取るのか。また、直接見たり聞いたりすることが困難なものを、いかにして見聞きすればよいのか。

現場でこのような課題に直面していると、おのずと特定の学問分野を越境せざるを得なくなる。と同時に、既存の「知」を最大限活用することの有効性に感謝しつつも、それを超える「何か」を創成することへの欲求が高まる。

そして、フィールド研究を、地域発展の実践活動、あるいは国家や地方自治体による資源政策（環境政策）と繋ごうとしたとたんに、「現場にいるだけではわからないことがある」ということに気付く。むしろ現場から離れることが有効な場合もあるのだ。

こうして、フィールドワークは、学問分野を越境し、学問それ自体をも越境し、そしてスケールを越境する。フィールドワークは、その人が長い年月をかけて培ってきた人間力が試されるという、実にスリリングな知的営みなのである。このような、まさに「躍動」するフィールドワークの試行錯誤を、若手研究者にリレー執筆してもらおう。

図3　マハカム川最上流の村へ向かう．インドネシア・東カリマンタン州にて．（2004年8月，井上真撮影）

図4　マハカム川上流域のダヤック人の暮らしのひとこま．インドネシア・東カリマンタン州にて．（2004年8月，井上真撮影）